

“無視”という恐ろしい遊び

「無視」というのは、最大の「嫌い」というメッセージだという話をどこかで聞いたことがある。

「好き」と「嫌い」は常に心の中に留めているから、思いの量は同じだとも言えるが、「無視」はその存在すら認めないことだから、心の中に留めないという意味では、「嫌い」の先にある感情なのだというのだ。

大人の世界でも、「無視」は存在している。しかし、世界観の広い大人は、無視する相手とは距離をおいて、他の友人や同僚と付き合いようにすればよいということを知っている。大人は自分の守る術を身に付けているのだ。

しかし、子どもの世界観は狭い。学校と家、塾と家の往復という小・中学生も多いであろう。ある女子児童のクラスでは、特別ないじめはそれまでなかった。しかし、突然、彼女にあいさつをするクラスメートがいな

くなった。話しかけても、誰も反応してくれなくなり、男子も女子も彼女の存在を忘れたかのようであった。はじめは、何かの悪ふざけかと思っていたが、時間が進むうちに、彼女は意識しないと息が吸えないほど、苦しくなったそうだ。無視は続き、食は細くなり、外に出ることもなくなった。

ベランダから外をポーツと眺めているときに、彼女は自分がいなくなっても誰も悲しまないだろうと思ってしまった。地面を見るうちに、吸い込まれるような感覚に陥っている自分が怖くなり、そのまま座り込んでしまった。自然と涙があふれ、座りながら泣いていたところを、異変に気がついた母親に部屋に連れ戻された。母親が事情を聞くと、無視をされ続けていると彼女は告白した。

その後、学校では、該当する児童たちに個別の聞き取りが行われたのだが、一部「距離をおいた」と認めた児童もいたものの、発言力があり中心人物であろう児童は認めなかった。ここで、「距離をおいた」というのは、「無視」のよくある言い換えである。日本語は便利だとつくづく思う。

私が彼女の母から相談を受けたのはここからである。

電話で事情を聴き、状況がよくなごう感じた私は、直接面談

を求め彼女からも時間をかけて丁寧な話を聞いた。その際、私は被害状況だけでなく、クラスの間関係も細かに「聴いて」いる。そして、母親のママ友の力を借りて根回しを進め、担任には無記名のアンケートで調査するよう伝えた。

調査の結果、発端は発言力のある中心人物の一人が、遊び半分で始めたことが常態化したということであった。そんな「些細な」ことが、少女を自殺寸前まで追い詰めていったのである。このような事例は多く見られる。「忙しくて何もしてあげられなかった」は理由にはならぬいし、なぜ気付いてやれなかったのかと後になって責めるのは簡単なことだ。

後に、クラスのほぼ全員が謝罪しに来た。その際、彼女の苦しみを想像させるように話すと、むりやり親に連れてこられたのであろうと思われる児童も表情が変わった。

私は、みんなが謝りに来るときにはおしゃれをしておいたらと、彼女にアドバイスしていた。久しぶりに会うクラスメート、たとえ謝罪だとしても普段着で会うのは、恥ずかしいというのは、乙女心なのである。

▽NPO法人ユース・ガーディアン＝探偵業のノウハウを生かし、客観的ないじめの実態を調査、レポートを作成するなどして数多くのいじめ問題の解決に寄与している。URL＝

<http://jime-sos.com/>

探偵がみた 学校といじめ

NPO法人ユース・
ガーディアン代表理事

阿部 泰尚

第5回